原野昇先生の思い出

原　野　葉　子

約30年の長きにわたって広島大学文学部の仏語仏文専攻を支えてこられた原野昇先生が，2006年3月をもってご退官されるとうかがいました。

もう10年以上前のこと，地元・広大の仏文に入学していちばん最初の記憶にあるのが，文学部の配布資料の中に見つけた「原野」先生のお名前です。偶然にも同じ苗字だったことで，当時のわたしには雲上人にも等しかった「大学教授」という存在が，がぜん活き活きと，親近感をもって感じられたものです。

平成6年当時，文学部はまだ東広島市に移転したばかりでした。新入生歓迎コンパは広島市内で，そして二次会は，三越裏のレトロな名喫茶「モンブラン」で，という慣例もまだ続いていました。コンパの後は，30人ほどでモンブランの2・3階のソファを占拠して，皆でなかよくパフェをたのしむのです。その席で，高校を出たばかりのわたしは，失礼にも，先生に直接おたずねしてしまったのでした。「あのう，先生とわたしはもしかして，血がつながっていたりするのでしょうか・・・」

世間しらずな新入生の質問に対して，原野先生は，普段とかわらぬあのはつらつとした笑顔で答えてくださいました。「はっはっは。いやあ，わたしの出身はね，広島ではないんですよ」（先日，原野先生のお生まれは兵庫県で，おじいさまは江戸から沼津に移られ，おとうさまの代から広島に居を定められたのだとうかがいました）。

けれどもその後，フランス語の研修合宿，大学院入試や学会，それに留学先のパリなどで，各地の仏文関係の方々から光栄な勘違いをされることが，じつにたびたびありました。「あなた，広島のハラノさん？ まあ！ もしかして，あの原野先生の・・・！！」たまには「ハイ，さようで！！」などと答えてみたい気持ちをぐっとおさえつつ，「残念ながら・・・」ときりだすたびに，中世フランス文学研究に先生が残してこられた足跡のおおきさが，あらためて実感される

のでした。

広大を卒業し，関西方面の大学院に進学させていただいてからも，先生は帰省してきた不肖の弟子をあたたかく迎えてくださいました。夏休みの研究室で，幾通りもある『狐物語』の写本について，また草稿研究にも役立つデジタルビデオの使い方について，さらには先生が留学なさっていた1970年頃のパリの日本館でのエピソードについてなど，さまざまなお話をうかがったことが，懐かしくもたのしく思い出されます。

ふりかえれば，広島大学の文学部棟の5階，先生のお部屋にはいつもやわらかな灯がともされていました。陽だまりの樹のような先生のご指導，ご尽力に，感謝の気持ちでいっぱいです。

原野先生，ありがとうございました。先生がこれからもますますお元気でご活躍されることを，こころから願ってやみません。